

原著 (Article)

地域の水の学習から大陸を越えた水の全校合唱へ

——ブルキナファソとフランスとの大陸間教育交流の一環として——

**From learning of local water to whole school choir about
intercontinental water problem: As part of intercontinental
educational exchange with Burkina Faso and France**

宇土 泰寛*

UTO, Yasuhiro*

林 敏博**

HAYASHI, Toshihiro**

摘 要

21世紀の重要なグローバルイシューとなる水問題について、各大陸の子どもたちが自らの地域の水問題を調べ、大陸を越えて学び合い、その学びから水のメッセージを出し合い、歌詞をつくり、合唱やダンスで表現し合う。曲は梶山女学園大学の渡邊康が作曲し、それぞれの国でアレンジして、合唱を行うという大陸を越えた交流活動を実施した。そして、2015年11月7日の東海ブロック国際理解教育研究大会の午後、フランスとブルキナファソと日本のそれぞれの実践を紹介し合い、国際シンポジウムを行った。この大会に向けて、日本の代表として、名古屋市立蓬来小学校が国際交流に取り組み、水の学び合い、音楽部の創設、演劇の鑑賞など、様々な活動を生み出していった。まさに、ホールスクールアプローチを学校はもちろん、地域や専門家ネットワークと共に実践したのである。

キーワード：水の学習、大陸間教育、フランス、ブルキナファソ、合唱

Key words：Learning about water, Intercontinental Education, France, Burkina Faso, choir

はじめに

人間、そして、地球上のすべての動植物が生きる上で絶対に必要な水、しかし、地球上のあらゆる人にとって、安全な水へのアクセスができるわけではなく、地域によって様々な課題を抱えている。水問題は、地球的課題でもあり、地域の課題でもある。まさに、グローバルイシューと言える。この課題に対して、世界の子どもたちが大陸を越えて学び合い、問題解決に向けての具体的な活動を行うことはこれからの持続可能な地球社会を創っていくためには、たいへん重要なことである。

また、これらの実践は、学び合い、表現、具体的行動を重視し、21世紀の地球時代を生きる子どもたちの豊かな資質形成を図ることにもなる。そのために、言葉は国や文化によって異なるが、身体表現と音楽（リズム）は国境を越える力を持っているので、ミュージカルを通して大陸を越えたプロジェクト活動を実施する。

* 梶山女学園大学教育学部

** 名古屋市立蓬来小学校

第1章 水の学習を通じた大陸間教育活動の展開

第1節 ブルキナファソとの交流の契機

ブルキナファソとの関わりは、宇土が東京大学の非常勤講師で、週1回上京していた折に、東京都港区の白金地区の地域交流活動を2008年から2009年にかけて、サポートしたことから始まる。そこでは、都市の再開発による新旧住民の対立を乗り越える国際支援の地域活動が発展し、世界銀行やJICAなどの協力を得て、ブルキナファソとのテレビ会議で「地球授業」を行うまでになった。この東京白金の第1ステージの取り組みの後、第2ステージとして、名古屋での取り組みが始まるのである。そこでは、宇土が、2010年に椙山女学園大学附属小学校の校長を大学と兼務し、附属小学校の机といす全校分をブルキナファソに贈り、それを機に、首都ワガドゥグーにあるル・クルーゼ学園と交流をするようになったのである。

その後、ブルキナファソを2012年2月と11月に2回訪問し、ル・クルーゼ学園も訪ねた。その時に、学校の取り組みを知ると同時に、ブルキナファソの地域の水事情やダムや浄水場など水に関わる施設の調査を行い、ブルキナファソでの水問題に関わることを決めたのである。当初は、日本単独で支援を行うことも考えていたが、ル・クルーゼ学園との交流の中で、ル・クルーゼの子どもたちが自らの国内の水問題を調べ、その解決の取り組みとして、フランスのアルザス地方の学校と連携してプロジェクト活動を実施していることを知ったのである。そこで、このプロジェクト活動に日本も関わり、協力連携しながら、水問題を探究し、人々の健康に悪影響を及ぼしている浅井戸ではなく、飲料水として使用できる深井戸を掘る支援を行うことにしたのである。

第2節 ブルキナファソとの音楽交流からメッセージ性を持った音楽交流へ

ル・クルーゼ学園との交流を実施するにあたって、すぐに水問題を扱うのではなく、まず音楽での交流を行うことになった。この決定の背景には、第1ステージの白金での交流で、2009年3月のテレビ会議を通じた地球授業交流の時に、日本側が日本の四季の歌を歌い、ブルキナファソ側がダンスを披露したことやブルキナファソへの支援募金を地域で行うにあたって、2009年5月に開催された「白金グローバルフェスタ」で音楽コンサートを実施していたこともある。しかし、音楽交流を行おうとしてもブルキナファソの学校には、民族楽器はあっても、学校で行う音楽教育としての楽器がなかったり、手に入りづらかったりという事情もあった。この問題を協議していた時、杉浦寛子大使夫人から、日本の学校でよく使っているリコーダーのお話が出てきたのである。

そして、日本に帰国し、千葉県の小中学校からも協力があり、小中学校を卒業する子どもたちのリコーダーを集め、第2回目のブルキナファソ訪問時にル・クルーゼ学園に寄贈したのである。ル・クルーゼ学園の子どもたちは、リコーダーで「メリーさんの

ひつじ」を演奏すると同時に日本語の歌詞でも歌ってくれたのは驚きであった。また、椋山女学園大学附属小学校の子どもたちも、ル・クルーゼ学園のザカネ理事長がいらしたときにすばらしいリコーダー演奏を披露してくれた。しかし、その交流は、音楽の披露だけで、文化交流としては意義があったが、子どもたちの主体的なメッセージはないままで終わったのが現実であった。今回の大陸間水プロジェクトにおいては、水の学びを「大陸間ミュージカル広場」として展開する背景に、地球規模での課題、地域の課題、つまりグローバルイシューを子どもたち自身が探究し、そのメッセージ性を持った表現としての音楽を通じた交流へと進んだのである。ただ、この音楽をプロジェクトの表現活動として本格的に行うには、交流活動の新たな出会いが必要であった。

まず椋山女学園大学附属小学校と同じときにユネスコスクールに認定された名古屋市立愛知小学校の校長林敏博先生のESDと多文化共生を基盤にしたホールスクールアプローチとの出会いがあった。その後異動された名東区の蓬来小学校においても、学校を改革し、この大陸間ミュージカル広場の活動を展開されたのである。そして、この活動の基盤となる音楽活動においては、椋山女学園大学教育学部の渡邊康先生の作曲と演劇家の杜川リントロウ氏との出会いがあったのである。この新たなメンバーとのネットワークから、ブルキナファソ、フランス、日本による音楽交流が生まれたのである。その日本側の蓬来小学校の活動を紹介したい。

第2章 学校改革を通じた学びの文化づくりと水についての学習

第1節 学校改革と学びの文化づくり

文部科学省は、昨年11月に中央教育審議会に出した諮問の中で、学びの質や深まりを重視することが必要であり、課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習（アクティブ・ラーニング）や、そのための指導の方法等を充実させていく必要があると提言している。このように、これからの学校教育においては、知識伝達型の授業から、子どもの主体的な学びを促すような学習活動や体験的な活動を重視して、子どもたちが主体的・協働的な学びができる問題解決型の授業へと転換していくことが求められている。しかし、小学校では学級担任制のため、学級に新しい風が入りにくく、これまでやってきた方法で大きな問題がなかったのが今のままでよとする雰囲気になり易い。そこでまず、教師の意識を変えるため、教師同士が自分の授業を積極的に公開して閉ざされた学級を解放し、授業研究を日常的に行うことにより、子どもが学習意欲をもって参加できる授業、楽しい授業、分かる授業づくりを通して、教室での学びの文化を変えていくことが必要である。蓬来小学校では、平成25年度から、すべての教育活動を通して、かかわり合う場・学び合う場・響き合う場の3つの学びの場を意識的に創り出し、それらをつなげていくことにより、子どもたちの学びの質や深まりを重視し、課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ授業の展開を目

指して、未来につながる学びの場づくりに取り組んできた。構造図に表すと図1のようになる。

かかわり合う場においては、人や物とかかわり合いながら交流を深める場ととらえ、異学年交流、地域の人々との交流や国際交流などの交流体験の工夫を図っていく。子どもたちは、そうした活動を通して、誰とでも公平に接する態度を養う。学び合う場においては、相互の学びを大切にする場ととらえ、教師は小グループによる学習活動の充実や学級全体での意見交換の場をいかに有

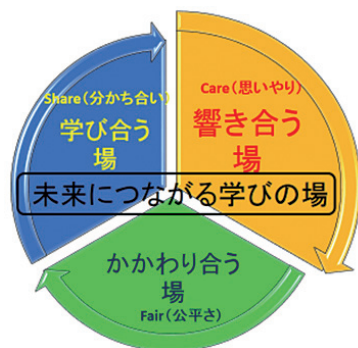


図1 未来につながる学びの場

効的に設定するかなど主に授業展開を工夫する。そして、子どもたちは、互いの意見や考えを分かち合い、相手を尊重する気持ちをもちながら、自分自身の考えを深める。響き合う場においては、子どもたち自身がこれまでの学びを振り返り、表現する場ととらえ、学んだこと、感じたことを自分の言葉や絵や歌で表現し、互いを思いやりながら、日常生活や自分の生き方を見つめ直す場とする。

具体的には、教科の学習では、子どもが自ら考え・学ぶことができるような授業を通して、単に知識を獲得させるだけでなく、学習した情報をそれぞれの言葉や感性でお互いに伝え合ったり、体験活動を通して交流し合ったりするという、相互に学び合う場面を大切にする活動に重点をおいた学びの場づくりに努めた。総合的な学習の時間では、ESDの視点を取り入れて、自然環境や人間同士のかかわりやつながりを重視した主体的な学びを創造する実践を進め、特に響き合う場である表現活動の充実に努めた。そして、児童が周りの様々な人々とかかわりながら自らの生き方を見つめることができるような、主体的な学びの場を創り出していくことを目指して、3年では「身近な自然や地域」、4年では「身近な環境とかけがえない命」、5年では「助け合う人々の暮らし」、6年では「世界の人々と自分の生き方」をテーマとして取り組んだ。さらに、これらのテーマを、低学年における生活科の学習とも関連づけ、教育活動全般を通して、自然や人との「つながり」を主体的に学び、周りから様々な影響を受け、互いに「響き合う」ことで、自らの生き方を見つめる学びの場を設定して、学びの文化づくりに努めた。

第2節 水についての学び

蓬来小学校では、6年生の総合的な学習の時間で、国際理解教育をテーマとして、「世界の人々と自分の生き方」について学んでいるが、発展途上国の貧困問題を考える活動を行うと、子どもたちは自分たちの生活と比較して貧富の差にばかり目がいき、自分たちは恵まれているので、貧しい人たちに何かをしてあげなければといった「〜してあげる」的な考えや、自分たちは日本に生まれて良かったという感想が先行してしまいがちになる。

また、子どもたちの学習は、インターネットや本を使つての調べ学習が中心で、自分で体験して感じたことというよりは、どちらかという、書かれているものを一方的に受け入れ、それをまとめて終わるといったパターンになることが多かった。そのため、何かをしなればといった意識をもち、行動しようとするきっかけはできても、地球規模の問題を自分事としてとらえて、何かをしていこうという気持ちを持続させることは難しいという根本的な課題が見られた。

そこで、グローバルイシューである“水”をテーマに、ローカルな水問題から地球規模の水問題に至るまで、大陸を越えてアフリカ、ヨーロッパの子どもたちと直接交流しながら、かかわり合う場、学び合う場、響き合う場を結びつけた学習を行うことが有効であると考えた。

水は、地球上のすべての生物が生きていく上で欠かすことのできない大切なものである。現在では、日本中どこにいても蛇口をひねればすぐに清潔な水を手に入れることができるが、実は日本でも少し前までは、場所によっては水を手に入れるのが難しい地域があった。しかし、私たちの祖先が、その水問題を克服してきたからこそ、今の日本の発展があるといっても過言ではない。このように、地球規模の水問題は、実は自分たちが住んでいる地域の水問題と共通点があり、つながっているため、日本や地域の歴史を学びながら、水問題を考えることができるのである。

さらに、理科の授業では「大気の循環」で、水が地球上を循環していることを学習するなど、水はいろいろな教科の学びと密接につながっているテーマである。また、私たちが毎日食べている食料の多くは、そのほとんどが世界各国から輸入されたもので、それらを生産するためには現地で多くの水が使われている。世界の水問題を考えることは、自分たちの問題と関係のない所で起こっていることではなく、むしろ自分たちに直接かかわっている問題であることが分かる。このように水問題は、グローバルイシューでもあり、ローカルイシューでもあるため、子どもたちにとって、この学習は、地球規模の課題をより一層身近な課題としてとらえさせるのに有効である。

そこで、水問題をテーマに、大陸を越えた子どもたちの協働的な学びを通して、地球規模の水問題は決して他人事ではなく、実は自分たちの生活に直接にかかわっているということを理解させる。その上で、どうすれば水問題を解決できるのか、自分たちには何ができるのかを考え、最終的に、それぞれの思いや夢を表現する場として、アートマイル（絵）や大陸間ミュージカル広場（音楽）を行うこととした。

第3章 音楽部と国際交流推進委員会の創設

第1節 音楽部の創設

水問題をテーマとした、大陸間の協働的な学び合いの学習は、総合的な学習の時間に国際理解教育を学んでいる6年生を中心に行うが、合唱やミュージカルなどの表現活動は、練習時間の確保が難しい。そこで、本年度新たに音楽部を創設し、音楽部が

合唱やミュージカルを行うときのリーダー的役割を果たしながら、6年生の活動をサポートするようにした。音楽部は、6年生の学びの補完的な役割を果たすと同時に、表現する場面においては6年生をリードする関係にあり、ここでも相互の学び合いが生まれ、さらに、児童集会の場面等を利用して、全校合唱へとつなげ、学校全体で表現活動の充実を図った。

第2節 国際交流推進委員会の創設と歌詞づくり

大陸を越えて、学び合う“水と生活”の学習を、6年生の総合的な学習の時間だけで進めていくことは、時間数の確保という点からみても難しい。そこで、リーダーとなってこの活動を推進していく児童を募集して、国際交流推進委員会を設置することにした。当初は、6年生の各クラス4名、計8名程度と考えていたが、積極的に参加しようと立候補する意欲の高い児童が多く、最終的に18名で発足した。1学期には、4回の委員会を開催したが、毎回、メンバー全員が活発に意見を出し合う姿が見られた。2学期には、椋山女学園大学の宇土先生から提案されたTST調査の手法を使って、子どもたち一人ひとりが、“水”からイメージする20個の言葉を書いたのである。



歌詞を選定している委員の児童

そして、子どもたちから出てきたものを基に、国際交流推進委員会のメンバーで、水をテーマにした歌に入れて欲しい言葉を拾い出した。その結果、「水は命、水は世界をめぐる、水は地球の宝物、水となかよし、I Love Water」などいくつかのキーワードがあがった。このキーワードを基に、専門家（椋山女学園大学の渡邊康先生）に作曲してもらい、できあがったものが下の歌詞である。

『水はいのち I Love Water』

水はいのち 世界をめぐる	水はいのち 世界をつなぐ
水はいのち 地球のたからもの	水はいのち 水となかよし
水はどこからくるのだろう	川と海をつなぐ いのちの水
きらきら輝く水	きらきらはじける水
ひとつぶの水が 川と川をつなぎ	海と海をめぐり 地球をみたく
水はいのち 世界をめぐる	水はいのち 世界をつなぐ
水はいのち 地球のたからもの	水はいのち
I Love Water	I Love Water

第4章 蓬来小学校から世界に発信した全校合唱

第1節 国境を越える工夫と振り付け

この歌を通して、子どもたちは水問題解決に向けて地球規模の連帯を図るメッセージを、大陸を越えて世界に発信していくことになる。子どもたちは出来上がってきた歌をととても喜び、音楽部では早速、まずは最初の発信の場となる、11月7日(土)に椋山女学園大学で開催される、第9回東海ブロック国際理解教育研究大会での発表に向けて、歌の練習を開始した。6年生でも、音楽の時間を使って練習が始まった時、国際交流推進委員会で、「日本語の歌詞に込められた水問題解決に向けての自分たちのメッセージ・思いが、どうしたら世界中の友だちに伝えられるか」を考えさせたところ、振り付けをしながら歌ってはどうかという提案があり、みんなで振り付けを考えることになった。そして、音楽部と6年生の有志が中心となって、試行錯誤を重ねながら、聞き手に分かりやすい振り付けを考え、水問題解決に向けた自分たちからのメッセージを発信していくことにした。



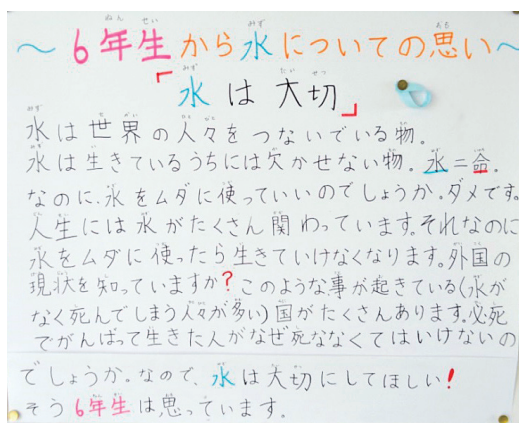
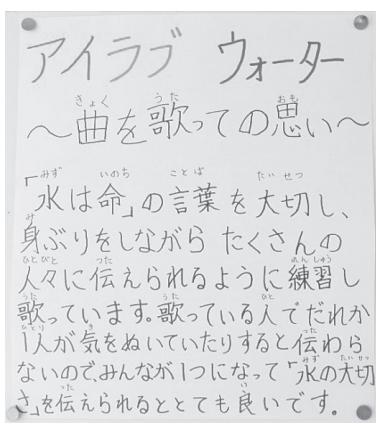
国際交流推進委員で振り付けを考えている風景



音楽部の練習風景

第2節 全校合唱

本校では、昨年度、ESD 掲示用パネルを設置し、それぞれの学年の学習成果を、この掲示板を使って全校に紹介するようにした。6年生は早速この掲示に、自分たちが水問題について学んできたことを歌にした『水はいのち I Love Water』という曲を



ESD 掲示用パネルで6年生が発表したもの（一部抜粋）

作ってもらったことを紹介し、「水は大切」「たった1てきの水で命をつなぐ」といった、自分たちの水に対する思いを書いた掲示物を作成した。

そして、全校の児童が音楽の時間を使って『水はいのち I Love Water』を練習した後、6年生と音楽部の児童が振り付けの見本を示しながら、音楽集会の場で全校合唱し、その様子をビデオに撮ったものを、ブルキナファソの Le CREUSET PLUS, フランスの Ecole de la VALLEE に送った。1ヶ月ほどすると、ブルキナファソ、フランスの学校の子どもたちも、同じメロディーにのせて、それぞれの学校で作詞した『I Love Water』を歌っている様子をビデオに撮ったものが送られてきた。その映像を見た子どもたちは、ブルキナファソやフランスの子どもたちも水に対して自分たちと同じ思いをもっているんだ、そして同じ振り付けをしている所もあるということにとっても感激し、親近感を抱くと同時に、一緒に水に対する学びを深めていこうとする気持ちを強くもつようになった。



蓬来小学校の全校合唱



ブルキナファソの子どもたちの歌と踊り

【フランス】 Ecole de la VALLEE

宇宙の中の青い地球
大きな河 小さな川
大きな海 小さな海
すべての命の母 みんなあなたが必要
東京でもパリでも みんなあなたが必要
水は過去へ私たちを誘う
恐竜たちは滝の下で鳴き声をあげていた
今 水は私たちを潤わせきれいにしてくれる
人魚や踊るクジラのように
水は幸せをくれる
枝を育て、花を咲かせ
子どもたちの未来を守る
生まれてくる子どもたちの微笑みも守る
地球のすべて青い海
貴重な真珠 飲める水
私は何ができるだろう
この宝物を守るために
すべての想いを込めて
I Love Water I Love Water

【ブルキナファソ】 Le CREUSET Plus

ダイヤモンドや金よりも貴重で
計り知れないほどの価値のあるもの
分かち合おう きれいに保とう
大切に気づこう
水は生命だということを忘れないように
水は命 命の源
私は水が好き 私の愛する命だから
水を守ろう 私の愛する命を
この水はやさしい
奇蹟で神秘的なもの
この雨 命の水
この嵐 この自然で命ある水
水に問題が起こって 井戸が干涸びたり
水源が汚染されたりすると
生きてゆけない
水を保護すること
水をきれいに保つことを学ぼう
水は命
I Love Water I Love Water

フランス、ブルキナファソの I Love Water

第3節 子どもたちの感想

子どもたちにとって、大陸を超えて同じメロディーで『I Love Water』を歌ったことは、一生忘れられない良い思い出となるだけでなく、国や言葉は違っても、大陸を越えてお互いに響感し合うことができる、ということを実感として受け止めることができ、たいへん大きな意味をもつ活動となった。

フランス・ブルキナファソとの歌での交流を通して

日本、フランス、ブルキナファソの3つの国や言葉が通うのに、3つとも歌詞に込められた思いが同じです。3つの国が一緒に歌うのは、I Love water を歌うことで、水は人間だけでなく、植物や動物、生物、作物、などいろいろな生き物が生きていける。水はきれいに保ち守らなければいけない。という事です。この歌をとおしていろいろな人に伝えられたいと思います。

フランス・ブルキナファソとの歌での交流を通して

I Love water を通じて、国境を超えて世界の人とつながることができて、とても楽しかったし嬉しかった。それぞれ国の歌詞の内容は違っていたけれど、伝えたい思いは「水は大切な資源で世界はつながっている」ということを伝えたいと思う。この思いをみんなで共有できたのがとても嬉しかった。今後も国際理解活動は続けたいが、この気持ちを忘れず頑張りたいと思う。

第5章 東海ブロック国際理解教育研究大会での合唱

第1節 東海ブロック国際理解教育研究大会の主旨

グローバル化が進展する21世紀は、その一方でそれぞれがもつ文化を互いに尊重し合う多文化共生社会でもある。これからの時代を生きる児童生徒には、互いの文化の違いを認め合い、広い視野に立って建設的な意見を交流し合い、豊かな発想と創造力から生まれた考えを情報発信できる力を身につけさせたいと考える。こうした視点に立ち、設定した主題『みとめあい、つむぎあい、つたえあう国際理解教育～大陸を越えて多文化共生の心を育て、地球と地域の持続可能な社会づくりをめざして～』のもと、シンポジウムでは、世界の子どもたちが大陸を越えて学び合う“水と生活”について、ブルキナファソ、フランス、日本の子どもたちの学習や実践の様子を、それぞれの国のシンポジストが紹介した。

第2節 オープニングセレモニーでの3カ国の合唱

オープニングセレモニーでは、“音楽（メロディー）は国境を越える、水も国境を越える、海で地球はつながっている、雲で地球をめぐっている”そんな思いで大陸を越えて子どもたちが歌で表現する活動（大陸間ミュージカル広場プロジェクト）を、フランス、ブルキナファソの子どもたちの活動は映像で、日本の子どもたちの活動は、蓬来小学校の音楽部と6年生の有志が直接会場に来て披露したのである。



オープニングセレモニーの風景

おわりに

水を共通テーマに、グローバルな視点から、各国のそれぞれの地域の水問題や水事情を探究し学び合い、そして、その学びを大陸を越えた新たな学びのステージで、発表し合う。今まで、それぞれのプロジェクト発表として、ポスターセッションなどで発表していたものから、今回、発表の方法を音楽と結びつけることによって、新たな展開が見られた。

これは、本論文で示された名古屋市立蓬来小学校の実践でもわかるように、学校の児童の意識を変化させ、学校の活動を拡大し、保護者の学校への関心と参加意欲を増すことになった。学校がひらかれると、学校外の専門家集団や組織と連携し協働し合い、新たな次元の活動を生み出すのである。そして、その活動は、国を越え、大陸を越え、新たなつながりを創り出していったのである。

そして、この活動を一般の公立小学校が実践してきたのも、大きな成果である。東海ブロック国際理解教育研究大会には、多くの都府県からの参加者があり、ぜひ『水はいのち I Love Water』の歌を学校で歌いたいという要望が多数あった。これを機に、学校同士がさらにつながり合い、公立小学校も私立小学校も、公立中学校や私立中学校へと拡大していくことによって、様々な次元での大陸を越えた学び合いが可能となる。さらに、この大陸間ミュージカル広場の活動は、名古屋市からも注目され、まちづくり、地域づくりへと発展しつつある。具体的には、名古屋市市民経済局文化観光部文化振興室が関わる「名古屋市・音楽あふれるまちづくり事業」として、2016年9月に、「アッセンブリッジ・ナゴヤ2016」が開催される。そこへの参加とそのプレイベントとして、3月21日に、名古屋港水族館で合唱を披露することになったのである。

謝 辞

この大陸間水プロジェクトに関わってくださった皆様、特に、国際コーディネーターの岡崎ますみ様、ル・クルーゼ学園のカトリーヌ・ザカネ理事長をはじめ、フランス、ブルキナファソの先生方、そして、音楽で作曲をしてくださった渡邊康先生、演出のプロの杜川様、最後に、名古屋市立蓬来小学校の先生方には心から感謝します。

■参考文献

宇土泰寛（2013）：ユネスコスクールにおけるESD「宇宙船地球号スクールプロジェクト」研究——宇宙船地球号 水と生活の旅。